
キキとあほうとにゃ

びふう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キキとあほうとにや

【Nコード】

N9375X

【作者名】

びふう

【あらすじ】

え、俺がやるのか？ ええと、どうも、喜衛喜々（きえいきき）ことキキです。この物語は二人の少年が異世界へと飛ばされ、大活躍して大活躍して大活躍するお話です。なんだ、これは。書き直せ、あほうが。

キキ+あほう〓キキの危機（前書き）

この物語はフィクションです。

キキ+あほう〓キキの危機

残念な男前とはどの学校にも一人はいるものだ。

それは俺の通う学校も例外ではなく、世代を越えて女性うけするやつが一人いる。ただし、黙って突っ立っていれば、という注釈つきだ。

そいつはとにかく問題を起こす。口を開けば意味不明なことをほざき、何かアクションを起こせば大なり小なり周囲の者に迷惑という名の被害をおよぼす。まったくもってた迷惑なやつである。

俺はもつともそいつの被害をこうむっている人物だ。残念なことに、そいつとは幼稚園からの付き合いであり親友と呼べてしまう仲である。もしもタイムマシンが開発されたなら、俺は栄えある一番めの使用者となることだろう。

そいつ、金子^{かねこと}鳶^{とび}春ことトビが時代を先取りし過ぎた感性で何か行動を起こすたびに後悔をする俺ではあるが、今以上に後悔をしたことがない。

なぜなら――

「どうやら冒険の始まりらしい。オレが、この世界を、救うつ！」

隣のあほうが世界の壁を越えたからからだ。

夏休みも残り一周間となったある日、俺はトビが強引に貸し付けてきたゲームをプレイしていた。ジャンルは恋愛シュミレーションというやつで、異世界を舞台に女の子との恋愛を楽しむといったものだ。

暇だったのでとりあえずプレイしていたわけだが、どうにも、俺の趣味には合わないのでそろそろ止めようと思いゲーム機の電源を切ろうとしたとき、あいつがやってきた。

なんの前触れもなく開け放った窓から、アクロバティックに。

ちなみに俺の家は庭付き二階建ての一軒家であり、自分の部屋は二階になる。

「ようキキ！」

部屋に入ってくるなり、トビは慣れ親しんだあだ名で俺を呼ぶ。

「わざわざ庭の木をつたって入ってくるな、あほうが」

言いつつゲーム機の電源を切ってベットに腰掛けた。

「わかってないな、お前は。突然の訪問ってのは意表をついてなんぼだろうが」

「お前は絶対セールスマンにはなるな」

「セールスマンになんかならないっての。セールスマンになるんだつたらNASAの職員になるっての」

なれると思ってるのか、こいつは。

「そんなことよりだ、面白い話を仕入れてきたんだよ」

「またかよ……」

トビは心霊現象や埋蔵金といった眉唾物（まゆつづもの）な話が好きで、噂話やネットなどで情報を拾ってきては真相を確かめに行きたがる。もちろん、俺をまきこんでだ。

「今度のはかなり信憑性があるんだ。訊いてくれ」

訊きたくはないが、こいつの場合は訊くまで催促をしてくるため、全身全霊を込めて嫌そうに訊いてやることにする。ささやかな抵抗である。

「どんな話だ？」

「言つかボケ」

よし、殺そう。

「そんな怖い顔すんなって、ジュピタージョークってやつだ」

木星ジョークらしい。こいつ死ねばいいのに。

「で、話だけだよ。なんでもな、夜中の二時から三時のあいだに鏡乃神社で魔法陣を描いて呪文を唱えれば異世界に行けるんだってよ」
行けるわけないだろうが。この話のどこに信憑性があるというんだ、こいつは。

「だから今日の一時半に現地集合な」

俺が行くの決定かよ。もしもトビに一般常識が通じるのなら、俺は限界突破200%で断るところなのだが、あいにく目の前で喜々としているあほうに一般常識は通じない。したがって、

「……わかった」

と返事をするしかないわけだ。

「よし、決まりだな。じゃあまたあとでな！」

キラツと齒を輝かせて男前スマイルを見せるあほう。トビはそれだけいうと来たとき同様に窓から出て行った。

「あいつ、約束を取り付けるためにだけに来たのか」

このクソ暑い中、それだけのために直接出向いてくる意味がわからん、っていうかメールで済むだろうに。まあ、別にいいんだが。

そんなことを思いつつ、俺は夜中という時間帯に備えるため、しばしの眠りにつくことにした。

鏡乃神社は地元で一番の規模を誇り、また、古い歴史をもつ重要文化財である。そのため、鏡乃神社には落ち武者が出るだの旧日本兵が出るだのと胡散臭い話が尽きない。去年の秋には猫耳をした人間が出たらしく、一部の層で話題になっていた。というか、猫耳だったら人間ではなくて妖怪だろうが。と思いながらトビに猫耳探索を手伝わされた後悔の秋。

去年のことを思い出しているうちに鏡乃神社に到着。鳥居周辺で

は十数人の不良っぽい人たちが呻きながらころがっていた。

「可哀そうに」

おそらくトビに絡んでいつて返り討ちにあっただろう。トビに絡むやからがまだいたとは思わなかった。間庭市のキチがい、金子鳶春と言えば関東では有名なんだが。

ころがっているやつらを後目に、俺は無駄に長い石段を登って行く。夜中で視界が悪く、慎重に歩を進めてようやく境内へとたどり着いた。

境内の中央ではトビが何らかの液体を地面にばらまいていた。取りあえずトビに近寄っていき声をかける。

「トビ」

「キキか、遅かったな」

「しつかり間に合うように出てきた。で、何をしてるんだ？」

「魔法陣を描いてる。ペンキで」

「……お前、ペンキを消す道具は用意したのか？」
「用意する必要なないだろ。せつかく描いたものをどうして消すんだよ」

こいつ凄えよ、重要文化財だとかおかまいなしだよ。神社に魔法陣を残していく気まんまんだよ。

「それにだ、オレたちは異世界に行くんだから消すの無理だろ」

異世界とやらに行くこと前提で考えてらっしゃるよこの人、誰か良い病院を知りませんかー？

「っし、完成」

俺が脳内突っ込みをしているうち、どうやら魔法陣とやらが完成したらしい。トビは持っていたペンキを魔法陣の外に置いた。

「これからどうするんだ？」

「魔法陣の中央で呪文を唱える。安心しろ、呪文はすべてオレが創ってきたからよ」

創ったのか凄いなあほうだな。

「ああそつ。じゃあ頑張れよ」

言って俺はトビから離れようと踵^{きんす}を返す。

「まてまてまて、どこに行く気だ。お前も魔法陣の中央に行くんだよ」

「俺にも呪文とやらを唱えろっていうのか？」

いくら俺たち以外に人がいないとはいえ、そんな恥ずかしいことはごめんだ。

「唱えるのはオレだけだ。異世界に行けるのは魔法陣のなかにいるやつ……っばいだろ？」

そもそも行けないっての。というか訊かれても困る。

「わかったから服を引っ張るな。中央に行けばいいんだな」

「おう」

何が『おう』だ、あほうが。そしてトビと並んで渋々と中央へと移動。

「じゃあ始めるぞ」

「はいはい。さっさと済ませてファミレスに行くぞ」

「異世界にファミレスは無いだろ」

現実世界の話だったの。異世界に行けると信じて疑ってないな、こいつ。

横で呪文という名のキチがい詠唱を聞かされつつ、俺は胡坐^{あぐら}をかいて座る。さて、ファミレスで何を食べようか、などと考えているとだ。

風がででした――

夏だというのに、頬をなでる風は妙にひんやりとしている。

ざわざわと音を発て、木々が騒ぎ出す。

降りそそぐ月明かりが強くなった、気がした。

胸騒ぎがする、嫌な感じだ。思ってゆっくりと首だけを巡らせる。がらん、がらん、寶錢箱の後ろに吊るされている鈴が風に揺れていた。

ただ揺れているだけ、それだけだ。それだけなのに、鈴の音が、俺には不気味に聞こえた。

なんだかおかしい、言葉にはできないが、とにかくおかしい。頬を舐める風が、ざわざわと鳴いている木々が、がらんがらんと響く凶音が、不気味に輝く月が、無駄に俺の不安を煽り、掻きたてる。

「……おい……トビ……なんだか様子がおかしい」
つぶやくと立ち上がり、トビに目を向ける。そして異常事態なんだと、俺はようやく理解した。

トビはまるで生気を感じられない瞳でぶつぶつと聞いたことのない言語をつぶやいていた。俺はトビの両肩をつかみ、揺すって必至になって呼びかける。

「トビっ、おいトビっ！……！」
反応はない。

「しっかりし——」
瞬間、周囲に光が満ちだした。トビの描いたでたらめな魔法陣の中が、まぶしいまでに光っている。

そして、満ちた光は閃光となって弾けた——

そのとき、人影を——

「で、気づいたらただっ広い草原でした。ってか……」

草が穏やかな風になびくなか、俺は、どうしてこうなったと今までの行動を振り返っていた。周囲を、「オレは勇者だ！ いやッホーイ」と嬉しそうにあほうが飛び跳ねるなか、俺は頭を抱えて今世

紀最大のため息をついた。いや、人類史上最大のため息かもしれない。

「よう兄弟、宇宙規模のため息なんぞついてどうしたよ」

「誰が兄弟だ、殺すぞお前」

「あれ、怒ってる？」

「怒ってない。とんでもないことになったと嘆いているんだ」

「そんなことよりよ、腹減ったから何か食おうぜ」

「そんなことだと……？ わけのわからん場所に飛ばされたつてのに、こいつにとってはそんなことなのか。ああもう、ほんと殺したいわこいつ。」

「なあ、キキ」

「なんだよっ！」

「なんかトラみたいなのに囲まれてるぞ」

「え……？」

いつの間にか、緑色の犬歯の長い、トラに良く似た動物に周囲を囲まれていた。お腹が空いているのか、ぐるぐると低いうなり声をあげている。

「あれだな。モンスターだ、きつと」

「詰みましたっ、本当にありがとうございますう……………」

「……いえアアアアアアアアアアア……………」

1 - (1) キキ+あほう+少女〃タイトル

「何を悶えてんだ、キキ」

そりゃあ悶えるだろうがっ、わけのわからん別世界に飛ばされたあげく、腹を空かせた緑色のトラみたいなのに周囲をかこまれてるんだからよ!!

「前から思ってたんだけどよ、お前って追い込まれると錯乱するよな」

「黙れあほうっ、全てお前のせいだろうが!」

「人のせいにするなよ」

お前のせいなんだよおおお!!

「落ち着けてキキ。グリーンタイガー程度、オレが返り討ちにしてやんよっ」

「……お前、俺が逃げるまで^{おとり}罠になれよ」

「なるほどな。オレが罠になっている間にお前が逃げるってわけか。さすがは智将キキだ」

いや、そう言っただろうが。どうして繰り返したんだこいつは。というか智将とか止めてほしい。

あほうが意味不明なことをほざいてる間もグリーンタイガーどもは包囲をじりじりとせばめていた。

「トビ、そろそろ来るぞ……」

「だな」

一步、また一步と、呻り声は迫ってくる。

正直、生きた心地がしない。間違はなく、俺とトビは食い殺されてしまうだろう。しかし、だからといって無抵抗でやられるつもりはさらさらない。

ごくりと、俺は生唾^{なまつば}を下す。

結果は目に見えていても、あきらめない。それが俺とトビだ。握ったこぶしに力が入る。

「なあ、キキ」

「なんだ？」

トビが俺に背中を合わせる。

「オレさ、生き延びることができたら二組のゆりちゃんに告白するよ」

それ、死亡フラグや。

あほうの死亡フラグに反応したのか、ついにグリーンタイガードも動き出す。長い牙をきらりと光らせ、雄々しく大地を蹴り、一斉に飛びかかってきた。

「死んでたま——」

少しばかり時をさかのぼる。

鏡乃神社で金子鳶春が呪文を唱えだしたころ、一人の少女がそれに気がついていて、正確には膨大な魔力の奔流ほんりゅうを感じ取ったのだ。眠っていた少女は押しつぶされそうな感覚にたまらず飛び起きる。

「これは……」

近い。それも、かなり。思うが早く、少女は布団をはねのけて大きめのベレー帽を被ると家を飛び出した。

わき目もふらずに少女は駆ける。速い。中学生とは思えないほどに。

あの時と同じだ、また、門が開こうとしている。行かないといけない。

ふと、少女の頭を親代わりたる好々爺の暖かい笑顔がよぎった。郷愁の念に胸がしめつけられる。少しばかり走る速度が落ちた。

ごめんなさい、おじいさん。でも、ミーニヤは行かないと。

少女は下唇を噛むと想いを振り切るかのように決意の表情をつくり、走る速度あげた。

いくつか珠の雫が、夜風にのっていた。

少女にとって鏡乃神社は良くも悪くも思い出深い場所であり、また、学校が終わると毎日来ていたため、見慣れた場所でもあった。しかしながら、こんな異常な雰囲気^{かも}を醸し出す鏡乃神社を見るのは初めてだった。

「何よ、これは……」

鳥居の前から見る神社は魔力が渦巻く危険地帯となっていた。まるでコントロールされていない魔力は、誰かが張ったであろう強力な結界を壊さんばかりに叩き、のた打ち回っている。

もしも魔力が結界を破って外に出てしまったならば、魔力耐性の低い人間族では、最悪、死に至るかもしれないと彼女は恐怖する。事実、鳥居周辺でころがっている者達はすでに意識がなく、危険な状態であった。

「なんとかしないとっ」

少女は心を奮い発たせる。震える足を無理矢理に動かし、神社へと踏み入る。

とたん、飢えた猛獣のような魔力が彼女を襲う。

お気に入りのベレー帽が吹き飛び、舞い上がり、敷地内を無秩序に乱れ飛ぶ。しかし今はベレー帽などに構っている暇はない。少女は風に目を細めつつ、鳥居周辺で気絶している人を助けだすよりも先に、原因をどうにかすべきだと判断をした。

いくら強力な結界が神社に張られているとはいえ、一人一人を助けていては結界がもたないだろうと考えたのだ。彼女の判断は正しく、すでに結界の限界は近かった。

心中で気絶している人たちに謝ると同時、無事であることを祈りながら彼女は輝く境内を目指す。風にはばまれながらも、彼女は石段を駆け上がる。そして、

境内へと辿りついた彼女は目にする。

輝きが閃光へと変わる瞬間。

異世界へと来てしまった自分を、救ってくれた、キキと呼ばれていた少年を――

荒れ狂っていた風が穏やかなものへと変わりつつあった。ゆつくりと、高密度の魔力が霧散^{むさん}していく。

境内には少女が一人。先程まで境内の中央にいた少年たちの姿はそこにはない。

ペタンと、その場に少女は座りこんでしまう。胸が高鳴っていた。茫然自失^{ぼうぜんじしつ}とは、今の彼女の状態である。

間違いない、あの人だ。一年前のことを思い出し、カツと顔が赤くなる。胸の高鳴りはいつそう大きくなっていた。

からんからんと、甲高い鈴の音が少女の耳に入ってくる。それで、はたと我に返った。

なにをボーっとしているんだ、こんなことをしている暇はない。

思っただけは立ち上がり、つい先程まで想い人が立っていた中央へと足を運ぶ。

「魔術陣……？」

お昼に来たときにはこんなものはなかったはずのに、と不思議におもいつつそれを観察してみる。

「凄い、なんて高度な魔術陣なんだろう」

魔術に詳しくないとはいえ、少しばかり心得のある彼女は感嘆のつぶやきを洩らした。もはやそれは魔術の域を超えた魔法陣とよべるものだった。魔術を極めた者だけが行使できる最上の術が魔法である。

まさか、魔術すら存在しないこの世界に魔法を使える人がいるなんてと彼女は思う。

少女の元いた世界ではともかく、こちらの世界には魔術師や魔法使いなどはいない。ただ、でたらめに描いたものを魔法陣としてし

まう奇跡的な阿呆はいるが。

「……陣が残っているのなら」

戻れるかもしれない。元の世界に、そして、あの人を助けないと。決意をし、すっと目を閉じて集中をする。足りない魔力はまだ周囲で霧散せずに残っている分で補うとして、して、、、、どうしよう、世界を渡る魔法の詠唱なんて知らないよつ。

うにゆうー、などと彼女は妙な呻き声を洩らす。

するとだ、唐突に彼女の呻きが途切れた。

そして彼女は唱えだす、知らないはずの呪文を。

世界の壁を超える魔法を。

まるで、何者かに操られているかのように。

1 - (2)

「死んでたまるかあああ！！！！！」

四方から跳びかかってくるグリーンタイガーに対し、俺は雄叫びをあげながら立ち向かう。

「と見せかけてスライディングっ」

完璧なるフェイントをかまし、跳びかかってきたやつらの下を滑りぬける。真正面から戦うとか馬鹿のすることだしな。グリーンタイガーの後ろをとった俺はすかさず態勢を整える。そして見た。そして知る。

「うらうらうらうらあー！！！」

信じられないことに、トビがグリーンタイガー一頭の前足を掴んでジャイアントスイングをかましていた。その様はさながら旋風であり、次々と周りにいた猛虎たちは吹き飛んでいく。どうやらあほうはグリーンタイガーを装備したらしい。

「相変わらず出鱈目なやつ……」

というかだ、俺がスライディングをせずに迎撃をしていたら、俺もジャイアントスイングに巻き込まれていたのではなかるうか？

「じゃあつ、オレ無双！！！」

ああ、そうだな。無双し過ぎて味方すらやっちまうところだったけどな。トビに投げ捨てられて矢のように飛んでいく哀れなグリーンタイガーを目で追いつつ、俺はそんなことを思っていた。

「よっしゃああああ、次にブン投げられたいやつはどいつだああああ！！！」

うざいテンションだな。というか他のやつらは吹き飛ばされたあとに逃げたつての。

「やる気まんまんなところ悪いんだがな、お前の敵味方関係ねえ無

双のおかげでグリーンタイガードモは撤退したぞ」

「マジか」

「ああマジだ」

「追うぞっ」

「まてまてまてっ。どうして追う必要がある」

今にも駆けださんとしていたトビの肩をつかんで制止する。せつかく追い払ったというのに、自ら危機に足を踏み入れる必要はない。「逃げられたら経験値が入らないだろ？」

なんとというゲーム脳。ついにリアルとゲームの区別がつかなくなつたようだ。

「残念なことだ、グリーンタイガーを倒しても経験値は入らん」

「そんな馬鹿な」

安心しろ、お前はあほうだ。

「というかキキ、これからどうするよ」

どうしてあほうやバカつてのは、こうも簡単に話題を変えるのか。まあ、経験値うんぬんの話を引つ張られても困るのだが。

さて、本当にどうしたものか。さきほど襲ってきた地球外生命体、いや、別世界生命体を見る限り、俺とトビは異世界に飛ばされたと仮定してしかるべきだろう。そのように仮定した場合、やはり元の世界に帰ることを目標にしたい。グリーンタイガーみたいな怪物がいる世界にいては命がいくつあっても足りないからな。

「なあキキ、取りあえずどっかで飯食おうぜ」

どっかってどこだよ、あほうが。なににせよ、こちらの世界の住人とコンタクトをとるべきだな。

「言葉が通じるといいんだが……」

人間でなくともいいので、最低でも意思疎通ができることを祈るう。

「おい、聞いてんのかキキ」

「聞いて」

言い終えようとしたとき、俺は視界のなかに浮かぶ光の珠に気が

付いた。どうやら光の珠は俺たちの足元から立ち昇っており、素っ気ないただの草原を幻想的なものへと変えていた。

「なかなか綺麗だな」

トビは周囲に浮かぶ光の珠を見つつ、のんきにそんなことを口にした。俺としては、今度はなんだ、また何か起きるのかといささか呆れていた。

光の珠が強く輝きだす。

まぶしさのあまり目を細めてしまふ。次に輝きは閃光となり、俺は目を開けていられなくなった。

「つつ！」

「光ってるっ、オレ、すげえええ光って、えええええうつつうつつ——」

そして閃光は弾け飛んだ。一緒にトビも弾け飛べばいいのに。

などと至極当然なことを思いながらも、強烈な光の波が過ぎ去ったのを感じた俺はゆっくりとまぶたを上げた。と、横のあほうが叫び出す。

「イギヤアアアアアアアア！　目がっ目がああああああ！！！！」

見ると、あほうは手で目を覆い、草の上をもんどりうつっていた。何を思ったのかは知らんが、察するに閃光を直視したのだろう。

前々から分かってはいたが、やはり救いようのないあほうだ。しばらくは何も見えないだろう。それだけならばまだいい、最悪の場合、失明しているかもしれない。

まあ、どうでもいいことだ。

そんなことよりもだ、まずは状況の把握だ。閃光が弾ける前と後で変化したところがないかと思い、周囲の状況を確認してみる。何者かと、目が合った。

「……………」

そいつは立っていた。何をするわけでもない。ただ、茫然と突っ立っていた。

少女だった。肩までの鮮やかな金髪、その前髪が風に靡^{なび}いている。吸い込まれそうなまでの綺麗な瞳。蒼と紅の、オッドアイ。

桃色の小さく瑞々しい唇が言葉を紡ごうとする。しかし言葉は紡がれず、閉じられた。

「うお、耳付いてる」

行き成りだった。トビが俺の肩越しから言い放った。どうやら俺はボーっとしていたらしく、その一言に驚いて少しばかり身体を弾ませてしまった。

「当たり前だろ、人間……なんだ……から……」
頭に何か付いとる。猫耳のような……

「へイ、その猫耳彼女っ！ オレ今、目が逝^いってて色の識別できないけどお茶しなあい？」

かかる！ そしてナンパ文句が斬新過ぎる。というか、どうして猫耳が付いているんだとか、いつの間に居たのか、だとか気にならないのかアイツは。

「すっごいねえ、それ地耳？」

地耳ってなんだ。初めて聞いたわ。

「え、その、」

「さわるから」

まさかの断定。さすがはトビ。

「にゃっ！」

トビに耳を触られ、驚きの声をあげる猫耳少女。

「マジか、地耳だ。なんか、でも、引っこ抜けそうだな」

「うにゃあっ」

ぐいぐいと耳を引っ張るトビ。猫耳少女は半泣きになっていて、今にも本泣きしそうだった。というか、にゃあにゃあと少女がうるさいので、トビを止めることにする。

「トビ、手を離してやれ。いい加減にしないと泣くぞ、その子」

「泣かれると嫌だな、わかった」

言ってトビは耳から手を離す。無茶苦茶なやつではあるが、トビ

は女の子を泣かせて喜ぶような悪人ではけっしてない。俺は二人に近寄る。

「あうあう……」

情けない声を出して耳をさする少女。あうあうて……こいつぶりっ子じゃないだろうな。

「なに？ このリアル萌え少女」

「知るか」

それにしても猫耳とはな。俺たちの世界にこんな珍妙なものは存在しないので、十中八九こちらの世界の住人だろう。

「あんた、この世界の住人だよな。色々と言いたいことがあるんだが、いいか？」

少女は俺の問いかけに対し、ボーっと俺を見つめてくるばかりでいっこうに答えない。もしかしたら言葉が通じていないのかも知れない。ここは異世界だ、有りえないことではないし、むしろ、その可能性のほうが高いといえる。

「言葉、通じてるか？」

改めて訊いてみる。すると、少女はうるうると瞳を揺らし始め、両の手を豊かな胸の前で合わせ、なぜか、感極まった声でこう言った。

「優しく……してほしいにゃ」

こいつ気持ち悪い。

1 - (3)

初対面の人に向かって優しくしてくださいとか、なんなのこいつ。何を求めているんだこいつは。

「大胆なやつだな。よし、犯^やるかキキ」

「犯らん、あほう」

まったく、これだから万年発情期のあほうは。

「あ、あのっ！」

トビに呆れていると、ぐいっ行き成り身を乗り出してきた少女。って近い近い。

「ありがとうございましたすにゃ！」

お礼をのべるなり、今度は勢い良く頭を下げる。もう、俺にはなんのことやらさっぱりだ。どうして初対面の女の子、それも異世界の猫耳少女にお礼を言われているんだ俺は。

「キキってこの猫耳と知り合いなのか？」

「そんなわけないだろ、間違いなく初対面だ」

猫耳の少女になんか出会っていたら忘れたくとも忘れられるわけがない。例え痴呆症^{ちほうしょう}になっただとしても覚えている自信がある。

「あのさ、俺はあんたに優しくしてくれだとか、ありがとうだとか言われる理由がないんだけど。誰かと勘違いしてないか？ そもそも、俺とあんたは初対面だろ？」

少女はゆっくりと頭を上げ、俺の顔をジッと見る。しばし凝視したあと、少女は口を開いた。

「あなたで間違いないですよにゃっ、向ここの世界に行ってしまったミーニヤを——」

「ちょおおつと待てっ」

俺の耳が確かなら、いま、目の前で首を傾^{かし}げているやつは、向ここの世界に行つて——などと口にしたか？

「あんた、俺と同じ世界からこの世界にきたのか？」

「あ、はい。でもミーニヤは、もともとはこの世界の住人なのですよ」

「つまり、俺たちの世界に行ったあと、こちらの世界に戻ってきたということか？」

「そういうことになりますですよ」

少女の言うことが本当だとしたら、この世界には世界間を行き来する何らかの方法が確立されているのかもしれない。もし、そうならばこれ以上の朗報はない。なにせ、簡単に元の世界に帰れるのだから。

「この世界では世界間の行き来する方法が確立されているのか？」

期待を胸に訊いてみる。

「されてませんですよ」

即答されました、どうもありがとうございました。

「おいキキ」

「なんだよ、くだらないことなら後にしてくれ」

「オレ、なんか空気じゃね？」

くだらねー。

「頼むから少し黙っててくれ、トビ。今は猫耳少女と大事な話をしてるんだ」

「あの、」

トビをかるくあしらっていると、おずおずと少女が口をはさんできた。

「近くに、こつちの世界で住んでいた家があると思いますので、そこでお話をしませんかによ？」

「それは助かるが、思いますって、また曖昧あいまいなんだな」

「ご、ごめんなさいですよ。もう、一年ちかく帰ってないので…」

…」

ああそうか、俺の元いた世界に居たんだもんなと納得。とりあえず、落ち着ける場所で話をできるのはありがたい。

「それは助かる。あんたさえよければ、是非にお願いしたい」

「はいっ、こちらです、着いてきてくださいにや」

何が嬉しいのか、満面の笑みで言うなりくるりと背を向けて着いてくるようにうながす少女。

「しっぽついとる」

少女の腰あたりでフラフラと左右に揺れるしっぽ。それにトビは好機の視線を向けている。

「トビ、掴むなよ」

「え、ダメなのか？」

「ダメだ。触りたいのなら家に着いた後で了解を得てからにしろ」
「うむ」

なにがうむだ、あほうが。

俺とトビは草原を歩きつつ、この世界について少女に色々と質問をしていた。例えば、『この世界で日本語は通じるのか』『通貨はあるのか』『中心となっている技術は何か』などである。これらの質問に対し、俺は簡単な答えしかもらっていない。詳しくは家に着いてから訊くつもりだ。

今はトビが質問をしていて、『胸でかいな、何カップ』とくだらないことを訊いていた。そのあいだ、俺は彼女に訊いたことを自分なりにまとめていた。

この世界は『魔術』技術というものが発達しているらしいが、社会通念などは俺たちの居た世界とはほとんど変わらないらしい。科学の変わりに魔術、という程度のものなのだろう。したがって、通貨の概念は当然のように存在し、生きていくためには労働をしてお金を稼ぐか、作物や狩りをして糧^{かて}を得なければならない。まったく、この世界も世知辛^{せちから}いものだ。

それと、言語に関しては種族間で違うらしく、当然のように日本語は通じないとのことだ。猫耳少女に日本語が通じるのは、彼女が日本に住んでいたからに他ならない。ただし、言語に関しては魔術道具でどうにかなるらしい。俺たちの世界という翻訳機のような物

があるのだろう。

「キキ、キキつ、キキ！」

訊いた話を整理していると、トビが俺の名前を連呼しているのに気が付く。どうにも、集中していたらしい。

「大声を出すな。で、なんだ？」

「着いたって」

「ん？」

言われて今更ながらに気づく。目の前に木造の小屋が建っていることに。

「……随分ずいぶんと綺麗だな」

一年ちかくも空けていたというのに、小屋とその周辺は妙に整然としていた。綺麗に磨かれた小屋、短く切りそろえられた草、手入れのいきとどいた花壇……どう見ても人の手が入っている。

「うお、見たことない花がある」

少年のようにきらきらと目を輝かせ、窓下の花壇へと向かっていくトビはほおっておき、不思議そうに小屋を見つめている少女に声をかける。

「猫耳少女」

「にゃ？」

「あんたの家つてのはここで間違いないのか？ 一年ちかく帰っていないにしては手入れがいきとどいているみたいだが」

「その、はずなんですけどにゃ……」

はて、と少女は首を傾げる。別に不思議がることはないと思うんだがな。少し考えれば、留守にしている間に誰かが住み着いたと予想がつきそなものだが。

「あんたが家を空けている間に誰かが住みついたんじゃないのか？」

「そうなんですかにゃ？」

いや、知らないけど。

「お、なんか居る」

ふとトビが声が発したと思うと、間髪もなく、ガッシャアン！

などというガラスの破碎音が響き渡った。俺と少女は反射的に音の方角へと顔を向けた。

「キキ。なんか捕まえたぞ」

うつれしそうに言葉にするトビ。見ると、あほうが花壇の上に備え付けていた窓ガラスを粉碎し、中に手をつ突っ込んでいた。どうやら、窓ガラスをぶち破って中に居た何かを、もしくは誰かを捕まえたらしい。

「ほんと、ろくなことをしないなお前は」

「まあな！」

褒めてないっての。どんだけポジティブなんだよ。

「にやにや、窓が！」

どんまい、猫耳少女。

「離せー離せー！」

と、いやに可愛らしい声が小屋の中から聞こえてきた。声の感じからするに、トビが捕まえたのは女の子らしい。なんだか犯罪の臭いがする。

「おお。この虫しゃべるぞ、キキ」

虫……だと……？

「この声……」

「トビ……とりあえず捕まえたのを見せてくれないか？」

「おう」

きやつ、という小さな悲鳴と同時に出てきたもの、トビの手に握られていたそれは。

なんかもう、生物？ 精霊？ なんとというか、妖精？

妖精って……。

「リーリエちゃんっ」

つと、呆^{ほう}けている場合じゃない。トビに足を掴まれ、ぷらんぷらんともがく妖精を見るなり、少女は妖精へと駆け寄って行った。

「この虫、猫耳のか？」

「あたしは虫じゃないやい、妖精族のリーリエなの！ それより離してよっ」

「トビ、離してやれ」

「ん、わかった」

返事をするなり、パツと手を離すトビ。おかげで妖精は地面にキスだ。痛そうだな。

「い、痛い……」

小さすぎる手で鼻をこりつつ、妖精は少女に顔を向ける。そして、「ミーニヤあ！」などと甘々な気持ち悪い声をだして彼女に抱き着いた。

「よしよし、大丈夫かにゃ？」

しゃがみこみ、優しく頭をなでる少女。俺はなでられている妖精をまじまじと見てしまう。

大きさは小学生の低学年ほどであり、一見^{いっけん}すると人間のようなうではあるが、背にはトンボのような四枚の小さな羽が付いている。

髪の色は黄緑色っぽく、髪型はポリウムのある髪をサイドでまとめた、サイドポニーテールとなっている。顔は良く整っており、リングほっぺが特徴的だ。美少女？ って部類に入るんだろっな。いかな、なんだかロリコンみたいではないか、俺は。

「……うん。それより、今までどこに行ってたの？ ミーニヤが居なくなってから、凄^{すご}い大変だったんだからあ」

あつーと、会話の流れから話が長くなる予感がある。

「大変だったって、街で何かあったにゃ？」

「うん。あのね、」

さて、悪いが遮らせてもらうか。このまま置き去りにされて話を進められると非常に困る。

「ああつと。悪いんだがな、ひとまず中に入らないか？」

「え、あ、はい。そうですにゃ」

中に入った俺たちは少女にうながされるがまま、手作り感たっぷりのちゃぶ台に着いた。少女はいま飲み物を入れてくれている。

「すっげ、RPGの民家みたいだ」

辺りを見回しつつ、トビがそんなことをつぶやいた。トビの言う通りで、家の中は中世ヨーロッパのような雰囲気^{ただよ}が漂っており、ほとんどの物が木で出来ていた。プラスチック製の物は一切なく、鉄製の物は調理器具といったごく一部にしか使われていない。この世界で鉄は貴重なものかもしれない。

「ねえ」

部屋を見渡していたら、俺の隣りでちょこんと座っている妖精に話しかけられた。大きくつぶらな瞳がジッと見ている。

「なんだよ」

「ミーニヤのお友達なの？」

「そんなところだ」

俺の適当な返事を聞いた妖精は何やら考え事をし、「ふーん」と言って正面を向いた。

「ねえ。あの乱暴者もミーニヤのお友達なの？」

しばらくして、タンスを漁るトビを指差してまたもや話かけてきた。

「ああ」

まとめて訊けよ、めんどくさいな。

と、飲み物を運ぼうとしていた少女がトビに気づいた。トビは綿で出来た簡素な女性下着を手に、「あれ、パンツちっせえ」などつぶやいている。

「ねえ。リーリエも……」

隣りでもごもと言いよどんでいる妖精を無視し、俺は、真っ赤になった少女とトビのパンツ綱引きを見ていた。「何をしてるんですかにや、返してくださいにや！」むーむーと、必死になってトビから下着を取り返そうとしている少女。対するトビは、「なあパンツくれよこのパンツくれよ」と余裕の表情で最低なことを言っている。

見ていて面白いので、しばらくそのままにしておく。

「——だからね、リーリエとも、お友達になってほしいの」

ふと、隣りから遠慮がちな声が入ってきた。見ると、うつむき加減で妖精がいじいじと床にのの字を書いている。ずっと俺に話しかけていたみたいだが、俺が聞き取ったのは友達うんぬんくだりの件だけだった。

何を言っただんたろうかと思い、妖精を見ると、妖精がちらりと俺を盗み見た。そして。

「リーリエいい子だから、お友達になるといいこといっぱいあるのにな……」

またもや、ちらりと俺を盗み見る。

そんなアピールいらないっての、めんどくさいやつだな。

「わかったから、ちらちらと見るな」

「お友達になってくれるのっ」

「ああ、なってやる」

「ありがとう、リーリエはリーリエって言うの！」

「ああそう。喜衛喜々だ、呼ぶときはキキで頼む」

「うんっ」

にぱーっと満面の笑みで笑うリーリエ。どうもやりづらい。改めて、俺は子供が苦手なんだと思い知ったよ、まったく。

「あ、千切れた」

パンツ綱引きに動きがあったようだ。トビのつぶやきに、視線をそちらへと戻すと下着は見事に引きちぎれて二つになっていた。引

き千切れたときの勢いだろう、少女は家具に頭をぶつけている。な
んとも間抜けなこつて。

「ということはアレだな。片方はオレがもらっていいってことだな」
なぜ、そうなる。どんだけ下着欲しいんだエロあほう。

「痛いにや……うう、ミーニヤの下着が」

「大丈夫なのか、ミーニヤ！」

慌てて駆け寄るリーリエ、そして彼女は少女を庇^{かば}うように前に出
ると、精一杯の怖い顔をつくってトビを睨みつける。

「乱暴者めっ、ミーニヤに謝れ！」

「なんだ、やる気が虫娘？」

トビの一言に、はうつ、と小さな悲鳴をあげるリーリエ。最初の
勢いはどこぞへと消失だ。

「リーリエ、すごい強いから、やめておいたほうがいいと思うなあ
……」

視線は明後日の方向へ向けつつ、そんなことをのたまうビクビク
妖精のリーリエ。

「強いってどれくらいだ？」

あほうが喰^くいつく。

「ド、ドラゴンくらい……」

基準がわからんつての。

「マジか、すげえな！」

なぜだ、なぜ架空の存在を比較対象にされて、すげえなんて言葉
が出てくるんだ。お前がドラゴンの何を知っている。

「待てよ？ お前を倒せばオレはドラゴンを倒したことになるんだ
な……」

いやいやいや、ならないつて。

「そ、そうなる」

いや、ならないつて。自分から死亡フラグを建ててどうするより
リーエ。あほうが次に言いそうなことなど予想がつきそうなものだ
がな。

「決めた。お前を倒し、オレは勇者になるっ」

リーリエ「ドラゴン」悪の親玉、討伐「勇者、どうやらトビの頭の中ではそう結びついたらしい。人類の理解を超えていやる。予想の遙か彼方だ。

「まままま待て」

焦りまくるリーリエ。もう少しだけあほあほコントを見ていたい気もするが、これ以上トビをほおっておくとリーリエがフルボッコにされるので幕を下ろしてもらうことにする。

「楽しんでるところ悪いんだが、そろそろ話し合いをするぞ」

「あ、そうですね。すぐに飲み物を持っていきますにや」

今までリーリエとトビのやり取りをぽかんと見ていた少女が立ち上がる。

「うむうむ、乱暴者と戦うのは後だな！」

「キキ、話は虫娘を倒してからでいいか？」

ひい、などとまたもや悲鳴をあげ、小走りで俺の背に身を隠すリーリエ。トビもそうだが、リーリエもめんどくさいことこのうえない。

「ダメだ。あまり言いたかないが、おれとリーリエは友達だからな、ケンカは無しだ」

「マジか」

「マジだ」

「ラスボスとダチとか、キキすげえな」

何がラスボスだ、あほうが。ほんと疲れる。

「まあな、お前も友達になっとけ」

「お前の友達はオレのダチだろうが」

なに、そのジャイアニズム、どこの剛田さん？

「なんと、リーリエと乱暴者はすでに友達だったのか！？」

もうめんどくさい、こいつらめんどくさい。

「らしいな。お前みたいなのラスボスとダチになれるとは、公園だぜ」
公園じゃなくて光栄だ、遊びに行つてこいあほう。

「うむ。お友達ならば仲良くせねばな。リーリエはリーリエ、よろしくな！」

「オレはトビって呼んでくれなっ」

「お友達が増えて良かったにや、リーリエちゃん」

柔和な笑みを浮かべて言うと、少女は飲み物が入った木製カップを手際良くテーブルに並べていく。

「うむ！」

うつさいな、人の耳元で大声出すなつての。

「リーリエ、座れ」

「うむ」

たたたと駆けて空いている場所に座るリーリエ、その隣りに、飲み物を配り終えた少女が腰を下ろす。トビは俺の隣りで足を投げ出して寝転んでいる。

ようやく話し合いの場が整ったというところだろう。

「ああそうだ、まずはあんたの名前を聞いておきたいんだが」

ずっと気にかかつてはいたのだが、俺は少女の名前を正式には訊いていなかった。まあ、ミーニヤミーニヤと連呼していたので名前じたいは知っているんだが。

「あ、はい。ミーニヤですにゃ」

顔を赤くし、うつむき加減で答えるミーニヤ。照れてるのか？

「まあいいや、俺は喜衛喜々、寝転がってるのが金子鳶春。呼ぶときはキキとトビで頼む。ところで、苗字はないのか？」

「この世界で苗字を名乗れるのは貴族様だけですにゃ」

貴族ときたか。苗字によって貴族とそうでない者を区別、いや、あまり苗字を名乗らないほうがいいか？」

「……はい、お察しの通りですにゃ」

とどのつまり、この世界は貴族制度による身分差があり、区別ではなく差別が行われているということだ。

差別ということは、この世界は貴族が取り仕切る社会制度だと容易に想像がつく。ミーニヤの苦笑を見る限り、貴族がそうでない者を虐げ、得をする世界なのだろう。

吐き気がしやる。

「キキとトビは貴族なのか……？」

大きな瞳に不安の色を乗せ、リーリエが訊いてくる。フルネームで名乗ったはずなのだが、どうやらリーリエは苗字に気づかなかったようだ。

「そんな顔をするな。確かに俺たちには苗字があるが、貴族じゃない。勝手に苗字を名乗っているだけのあほうだ」

別に異世界から来たことを隠すわけではないが、好奇心旺盛（こうきしんおうせい）そうなリーリエにそのことを話すと質問の嵐にあいそうなので、そういうことにしておく。

「……本当？」

「ああ。だよな、ミーニャ」

「は、はい。リーリエちゃん。キキさんはとっても良い人だよ。怖がらなくても大丈夫」

「うむ……」

リーリエは随分と貴族に酷い目にあわされたらしく、ミーニャに抱かれ、今にも泣きそうな表情となっていた。

「お前、貴族つてのに何かされたのか？」

寝転がったまま、トビがリーリエに訊いた。

沈黙が場を満たす。

しばしの間を得て、嗚咽おえつが洩れ出した。

「リーリエちゃん……街で、何かあったんだね？」

ミーニャに抱かれた腕の隙間から、こくりとうなずくリーリエが見えた。

「リーリエ、妖精属で珍しいから。領主様が欲しいって……無理に連れて行くこうとして……でも、街の人たちが守ってくれて、逃がしてくれた」

「そう、だからミーニャの家に居たんだにや……」

「ずっと一人で寂しかった、街のみんな、すごいすごい心配だったけど、リーリエ、本当は弱っちいから、行けなかった」

そう、たどたどしく口にしたリーリエ。止めどなく落ちる雫、それは、彼女の寂しさと悔しさ、なにより、街の人を思う気持ちであふれ返っていた。

寂しかったからこそ、彼女は俺なんかも友達を欲ほっしたのだろう。守られるだけで何もできなかった自分が悔しかったからこそ、彼

女はミーニヤを守ろうとトビに向かっていったのだろう。

いじらしいことだ。仕方ない、話し合いは中断だ。

「街とやらに行くぞ」

俺は立ち上がりつつ、口にした。

「キキ……でも……」

リーリエは街に戻るのが怖いんだろう。分からなくはない、なぜなら、リーリエを逃がしたことで街の者がどのような目にあっただのかなど、言うまでもない。自分のせいで街の者に辛い想いをさせてしまったのだ、嫌われたと思うのが普通だろう。

けどな。

「でも、じゃない。怖がる必要はない。みんなお前が無事なのか心配しているはずだ」

街の者はリーリエを逃がしたことにより辛い目に合うことは分かっていたはずだ。そんなのは覚悟のうえで、クソ貴族のクソ領主に刃向ったに違いないのだ。もしもそうじゃ無く、戻って来たリーリエに罵声を浴びせるやつがいるとしたら、そいつはただのクズだ。

「リーリエが戻ったら、また、街のみんなに迷惑がかからない……」

？

「かかりやしないって。え、何故かって？ 俺がクソ貴族のクソ領主をフルボッコにするからな」

「ダ、ダメですよにゃ、貴族様に手を出せばこの世界で生き辛くなつてしまいますにゃ！」

そんなことは百も承知だ。街のやつらの後のことを考えれば、とんでもない最悪な行動だということも理解している。でもな、そんなことは『後』でどうにかしてやるよ。

「知ったことか、友達を泣かせたままのほうが生き辛いんだよ、俺は」

まずは泣いている友達を笑顔にするのが先なんだ。

「キキさん……」

「完全にスイッチが入っちゃったな」

トビがむくりと起き上がり、こきりこきりと首を鳴らす。

「やるか、キキ」

「当たり前だ。ミーニヤ、案内だけでいいから街に連れて行ってくれ。頼む」

真っ直ぐにミーニヤを見つめ、あらん限りの気持ち瞳にのせた。少しして、

「キキさんは、もっと落ち着いた方だと思っていましたにや」

「イメージ違いで悪かったな。どうにも、俺は子供らしくってな」

「というかキキはあほうだ」

トビにあほう言われると腹が立ってくるな。クソ貴族の前にこいつをフルボッコにしてやろうか。

「でも、お優しい方ですよ」

慈しむような、なんか、そんな笑顔で彼女は言った。凄い背中がかゆくなる。

「リーリエちゃん。街に行こうか」

ミーニヤの問いかけに対し、リーリエに全員の視線が集まる。

「……でも、」

「でもはいらない。何もかも、俺たちがどうにかしてやるから。リーリエがすることは、もっとも難しい、友達を信じる、ということだけだ」

まったく、なんというくっさいことを言ってるんだ、俺は……

「……うん。みんなを、信じる」

泣き腫れた顔で、彼女は遠慮がちに、だが、確かに、笑った。

これは、とある老人の語りである。

オルベールの街は大草原のど真ん中に位置する田舎町で、昔からさびれた街だった。しかし、前任の領主、オルタ・ラーセンによって街は活気ある栄えた街に変わった。

オルタ・ラーセンは元は王都所属の貴族であり、無階級層、つまりは平民を第一に考えて政策を執る親民派といわれていた。真面目で慈悲深く、また、その政治手腕は他の貴族よりも頭一つ抜きん出ていた。

そんな彼が田舎街に赴任ふにんすることになったのは、なにも、オルベールを活性化させるためではない。他の貴族に疎うとまれていた彼は、謀略によって王都を追い出され、オルベールへと左遷させんされたのである。

しかし彼は腐くさらなかった。

オルベールに着くやいなや、まるで活気のない街を嘆き、積極的に街の者と関わりをもつて町興まちおこしを始めたのだ。

敏腕のオルタをもつてしても、特産物もなければ観光名所もない街で金を生み出すのは難しかった。けれども彼は諦めず、どうにかできないかと日々、頭を抱えていた。

そんな時だった。ふらりと、妖精がやってきたのは。

妖精属が人前に姿を見せるのは珍しく、ここ数百年では目撃例すらなかった。オルタはすぐ、宿で保護されている妖精に会いに向かった。

妖精は幼おとなかった。オルタを見た妖精は駆け寄っていくと、開口一

番、こう言った。「リーリエ、いい子だからお友達になると良いこといっぱいあるなあ……」と。その日、妖精はオルタの友人となった。

妖精は無邪気で心優しく、誰よりも笑顔が似合う可憐な子だった。彼女は街の者に可愛がられ、愛されていた。また、彼女も街のみんなが大好きだった。

ある日、彼女は街の人々のために何かできることはないかと、オルタに相談を持ちかけた。

街のみんなに恩返しをしたい、みんなに喜んでほしい。あまりにも純真無垢な想いに、オルタは渋々、「みんなのために見世物になる気はあるかい？」と告げた。良く意味の分かっていない幼い友人のため、彼は噛み砕いて説明をする。

話を理解した妖精は寸分の迷いもなく、満面の笑みで、「みんなが喜ぶのなら見世物でもなんでもするぞ！」と、返事をした。

その後のオルタは凄まじいものがあつた。住民に彼女の想いを伝え、街の者と一丸となって行動を始めた。

まずは私財を投げ売って街と王都をつなぐ街道の整備を行い、次に夜盗や魔物対策のため、獣人族に街道の警備を頼み込んだ。獣人族は人間族よりも身体能力が高く、戦闘に長けた種族であり、ゆい

いつ人間族に友好的な種族である。

獣人族の協力もあり、街道の安全が保障されると、オルタは王都や各地の街から商人を呼び寄せて妖精の存在をさり気なく見せつけた。オルベールの街から帰った商人たちにより、瞬く間に妖精の存在は大陸中に広がり、オルベールの街は観光客であふれ返り、宿や酒場といった店が大繁盛し、街の者が総出で作ったリーリエ人形が飛ぶように売れた。

これにより、オルベールは活気に満ちた豊かな街となった。

しかし、栄華は長くは続かなかった。

突如、オルタ・ラーセンが領主の任を解かれたのだ。獣人族との独断交渉の責を問われ。

オルタ程の男に抜かりはない。街道の安全強化を名目に、しつかりと王都より許可を得てから獣人族の協力を取り付けており、許可状も持っていた。だが、オルタの目覚ましい活躍を快く思わない貴族たちによって、彼の持つ許可状は偽造とされた。金と、権力がものをいう社会なのだ、この世界の貴族社会は。

オルタは領主の任を解かただけでなく、苗字をも剥奪された。貴族にとって苗字の剥奪、それ、すなわち、平民になるということだ。

オルタの後任に着いたのは、ゲローブ・ランセンというごく一般的な貴族だった。一般的、つまりは無能で強欲ということである。

ゲローブは欲した。妖精を、コレクションとして。

街の広場、そこで妖精はいつものように街に来た観光客と遊んでいた。彼女にしては遊びだが、それは街の催しの一つで、キキたちの世界でいうところの鬼ごっこである。皆が楽しそうにしているなか、そこに、ゲローブ率いる騎士団がやってきた。

剣を携え、重厚な鎧を纏った騎士団と貴族たるゲローブの登場に、場は一斉に静まり返った。重々しい空気が流れる中、妖精はゲローブへと駆け寄り、「一緒に遊ぶのか？」とにんまりと満面の笑みで問うた。

答えは、蹴りで返ってきた。

ゲローブは妖精の腹部へと蹴りをみまい、「気安く話しかけるでない、物は黙っておれ」と吐き捨てた。騎士団に命ずる、一言、連れて行けと。

妖精はなす術もなく、髪を無造作に引っ掴まれ、痛い、痛い、悲痛な声をあげている。誰も助けには入らない、うつむいて地面を見るばかりである。貴族に逆らっては命に係わる、離せと言おうものならば、国家反逆罪として一族郎党打ち首となる。ましてや、戦闘訓練をつけた騎士たちに平民がかなう訳もない。

例えば子供が痛みと悲しみに泣きわめいても、どんなに愛らしい子であっても、貴族がすることには口を挟まないのが賢い生き方

なのである。

ただ、どこの世界にも馬鹿は居るものだ。

オルタ・ラーセン、いや、オルタは馬鹿だった。彼は広場の出口で、たった一人、ゲローブたち騎士団の前に立ち塞がった。貴族の頃に召していた立派な衣服は簡素な布でできた服へと変わり、腰に帯びていた家宝の剣は今やなく、手に握られるは鍬である。彼に貴族の面影はどこにもなかった。

ゲローブは笑う。醜悪な顔をさらに歪ませ、肥えた腹を愉快気に叩き、かつて、やり手の貴族として名を馳せた男を。

オルタは叫んだ。ゲローブの笑い声などかき消すほどの声で、たった一言。

「友よつつ、いまっ、助けるぞ!!!!!!!!!!!!!!」

騎士団を相手に、彼は鍬を手に立ち向かう。ゲローブを無視し、一目散に妖精を掴む兵士へと襲いかかる。瞬く間に場は騒然となった。騎士団は咄嗟に迎撃を試みるも、邪魔が入った。

オルタは苗字を剥奪され、そのさいに財産も失った。

しかし、彼を慕う民の心までは、失ってはいなかった。

オルタ様を護れと、リーリエを助けると、その場にいた街の者が理性の介入よりも早く、身体が動いたのである。

大乱戦のさなか、妖精は街の者の手によって、草原の監視小屋たる、獣人族のミーニヤの家へと逃がされた――

「なんて言ってるの、このじじい？」

「俺に訊くなよ」

いま、俺たちはリーリエが以前住んでいた街に来ており、そこで出会った老人に家へと招かれ、なんか良く分かん話を聞き終わっ

たところ……だと思う。感知的に。

言葉が分からない、というか、言語が違うので何を言っているのかさっぱりだ。この世界の住人たるミーニャとリーリエには通じているらしく、ミーニャはリーリエを抱きしめて辛そうな顔でなにやら声をかけていた。

「やっべ、ミーニャが何を言ってるのかも分からなくなっちゃった」

「安心しろ。俺もだ」

「安心した」

早いな。

ミーニヤ、リーリエ、老人を見ながら、俺は疑問に思っていた。
ミーニヤと老人の会話はまったく意味が分からないのだが、不思議なことに、何故かリーリエの言葉だけは理解できたのだ。しかも、リーリエの言うことは全員が理解できていた。これは、おかしいことである。

ミーニヤはともかくだ、俺とトビが理解できる言葉を老人が理解できるわけがないのだ。

「なあ、ミーニヤ」

「kjfdぎう?」

気持ち悪うう、何言っただこいつ。

「あのさ、俺とトビはこっちの世界の言葉が分からないんだが」

「あ、そうでしたにや」

そう言つとミーニヤはちろつと舌を出した。かわいいなあ。

なんてことは思わない。純粹に殺してやろうかと殺意が芽生えた。

「萌えー」

トビは相変わらず気持ち悪い。

「少し待っていてくださいにや」

言つなり、彼女は何やら老人と二三言葉を交わす。老人は席を立つとタンスの中から小さな小瓶を取り出し、そして席に戻って来た。

「精霊の雫だ……」

小瓶こびんの中に入った虹色の丸薬を見て、リーリエがポツリとつぶやいた。小瓶をミーニヤが受け取り、中から二粒とり出すと俺とトビに差し出して来る。

「これは精霊の雫というもので、これを吞めばどのような言葉も理解できるようになる秘薬ですにや」

なに、その便利アイテム、理屈抜きですか。貴方は未来からやってきた猫型ダメ人間製造ロボットですね。ええ、分かりますとも分

かりますとも。

とか、どうでもいいことを思いつつそれを受け取り、まずはトビが呑むのを待つ。なんの警戒心もなく、トビが呑みこむ。トビの体に変化はない。

「じじい、何か食い物をくれ」

口の悪さはこの際はおつておくとして、トビの言葉が通じたかどうか問題だ。

「jdにぬrげうげj、lk gg」

老人が何か言った。気持ち悪い。

「分かる……わかるぞ、オレにもこの世界の言葉がつ！」

よし。いつも通りのあほうだ、呑んでも問題なさそうだな。俺も思い切つて呑みこむ。

「……じいさん、俺の言葉が分かるか？」

「うむ。よう聞こえておる」

よしよし、これで言語に関する問題はクリアできたな。さっそく質問といくかね。

「なあ、じいさん。この街の領主つてのはどこにいるんだ？」

俺の言葉を聞くなり、老人はあからさまに渋い顔をした。それだけで、ここの領主が嫌われているということを感じた。

「領主館におるが、ゲローブになんの用かね？」

「領主館つてのは、どんな建物だ？」

老人の質問を無視し、続ける。

「この街で一番大きく、立派で醜い建物みにくじゃ。大通りの突き当りに建つておる」

「わかった。精霊の雫といい、貴族の居場所を覚えてくれた事といい、感謝するよ」

「もう行くのか、キキ」

「ああ。飯は現地調達だ」

「おっけ。楽しくなってきた」

俺とトビは席を立つ。そして俺が玄関扉を開けようとしたとき、

老人に声をかけられた。

「まだ、質問の答えを訊いておらんが」

グローブになんの用かって？ なに、たいした用事じゃない。ただの高校生がガキみたいに暴れるだけだ。要はさ、

「ムカつくから、ぶん殴ってくる」

そういうことなんだよな。

「ほほう。随分と分かりやすい理由じゃ、若いとは良いのう。して、ミーニャちゃんとリーリエちゃんは どうするのかね？」

老人は自慢のあごひげをゆったりとしごきつつ、二人に問う。

老人の問いは酷こくな質問である。この世界でミーニャは獣人族の街道警備員であり、貴族との揉もめ事は人間族と獣人族の友好関係に係わってくる。つまり、外交問題となり、最悪の場合は戦争になってしまうことだ。

それはリーリエにとっても同じだ。彼女は妖精族であり、妖精の捕獲というグローブの暴挙はオルタによって食い止められ、内々に彼が処理をしたため、妖精族との外交問題には発展しなかっただけの話だ。

無論、長い月日を生きてきた老人はそれを理解している。そのうえで、キキとトビをほおっておくのかと問うたのである。

「ミーニャは……」

力なく垂れ下がった耳からは彼女の葛藤かつとうが窺うかがえる。

キキの友人を想う気持ちに胸を打たれ、彼女はこの街にキキとトビを案内してきた。けれども、今更ながら、それは間違いだったのではないかと思う。

貴族を相手にするということは、この世界で最大の勢力を相手に

するも同義である。ましてや、領主館は騎士団の一個小隊が警備を
しており、たった二人で勝てるような安い相手ではない。

その場の雰囲気の流れ、自分とはとんでもないことをしたのでは
ないだろうか。どうして、もっと強く止めなかったのだろうか。これ
では、二人を死地に連れてきたのも一緒ではないか。

「ミーニヤ、大丈夫？」

気が付けば、彼女を心配そうにリーリエが覗き込んでいた。

「あ、うん……リーリエちゃんは」

コンコンと、丁寧なノックが扉を鳴らした。

コン、さらにもう一度、ノックが鳴った。

「ふむ」

突然の来訪者に対し、老人は扉を開け、その来訪者を迎え入れる。
中へと入ってきたのは、目深にフードを被った長身の男だった。

男には左腕がない。

「……これは、驚いたな」

男はミーニヤとリーリエを見るなり、数瞬固まったあと、そう洩
らした。

「久しぶりだね、ミーニヤ君。それと、我らが街の友人よ」

言って男はフードを取る。

「オルタさん!？」

「オルタ!?!」

ピーピーと笛の音が鳴り響く。

いやさ、俺としてはだ、気に食わないクソ貴族のクソ領主をフル
ボッコにしようと思っていたわけだ。お偉いさんの居る場所だから
警備もいるだろうとは思ってた。でもさ、まさか本物の騎士が居る

とは思わなかったんだよ。

「じゃあああああ、かかってこいやああああ！！！！！」

恐れを知らないってのは凄いやな。

老人の言われた通りに領主館に来てみれば、鎧に身を包み、剣を持った二人の騎士が出入り口を護っていた。

一気に俺の熱は冷めたね。とはいえ、どうしても貴族をぶん殴りたい俺は、どうにかして中に入り込めないかと考えていた。

その矢先だよ。

トビが喧嘩上等だよ。

気づいたら、トビが出入り口の騎士を行き成りぶん殴ってやがった。で、ぶん殴られたほうはピーピー笛を鳴らして侵入者を知らせ、もう一人はトビに持ち上げられている。

鎧を着た人をもち上げるとか規格外すぎる。

「キキー、何をやってんだ。早く行こうぜっ」

トビは持ち上げた騎士をもう一人の騎士にぶつけ、そんなことを叫ぶ。

「相変わらずめちゃくちゃなヤツだな。結局、正面突破になってしまったな……まあ、いつものことか」

トビが問題を起こすのはいつものことだ。行き当たりばったりってのは慣れている。

それに、なんだかんだ言って、俺とトビでどうにかできなかった問題は無い。

「ああ、いま行く」

なんてことはない。いつものことだ。

そう思い、無駄に広い領主館の敷地へと足を踏み入れた。

「先程の笛の音は……」

領主館で鳴らされた笛の音は街中に響き渡っていた。侵入者知らせる甲高いそれは、建物の中に居るミーニャたちにも聞こえていた。

「あの、若い連中じゃな」

「アインデル翁^{おう}は、何が起こったのかご存じなのですか？」

オルタの問いかけに、アインデルと呼ばれた老人は小さくうなずいた。

「知っておるよ。ただ、それは儂^{わし}ではなくミーニャちゃんに訊くが良からう」

「ミーニャ君にですか？」

オルタはミーニャに顔を向ける。彼の瞳に、肩を小刻みに震わす獣人族の少女が映った。

賽^{さい}は投げられてしまった、もう、キキさんとトビさんは後戻りができなくなってしまったと、彼女は自分のせいだと震えていた。

二人を助けに行けたならどれほど楽になるだろうか。けれども、それは叶^{かな}わない。彼女は獣人族で、キキとトビは人間族だ。種族の壁が邪魔をする。彼ら二人を助けたばかりに、同族の仲間たちに迷惑をかけてしまったては本末転倒も良いところだ。

「……ミーニャ君。良ければ、何が起きているのか訊かせてもらってもいいかい？」

オルタはなるべく優しい口調を心がけ、今にも消えてしまいそうなミーニャに語りかけた。

「……リーリエちゃんが領主様に酷い仕打ちを受けたって訊いて、ミーニャの恩人とお友達が怒って……」

「まさか、それで殴り込みをかけたのかい？」

なんとという無鉄砲な輩がいたものと、オルタは驚きに目を見張った。無鉄砲さもそうだが、なにより、貴族に向かっていく民がいるとは思わなかったのだ。貴族に対する民の恐れは、元貴族だった彼がいちばん良く知っているのだから。

「無理矢理にでも二人を止めるべきでしたにや、ミーニヤのせいだ二人は……」

——死んでしまう。

「ミーニヤのせいじゃない、リーリエが弱っちいせい。勇気を出して街のみんなに合いに来ていたら、キキとトビは街にこなくて済んだ。だから、」

「そなたらは勘違いをしておる」

唐突に、アインデルが口を挟んだ。

「儂が思うに、あの、若者たちは誰にも止められなんだと思うぞ」

「でも、ミーニヤが街に連れてこなければ」

「ミーニヤちゃんが連れてこずとも、あの若者たちならば自力できただであろうよ。なにせ、『ム力つくから、ぶん殴ってくる』と、単純極まりない理由で動く輩じゃからな」

そこまで言うと、アインデルは愉快気に笑った。

「どこぞの元貴族と同じくらい清々しいやつらよの」

「いやはや、まいったね」

オルタは苦笑し、続ける。

「ところでだ、一つ、面白い案があるのだが、聞いてみないかい？」

「館の中には入れるな、追えっ！」

まずいますまずいます、ひっじょうにまずい。

超人のトビとは違い、普通の人間たる俺は騎士たちとは戦わずにデッドオアアライブの鬼ごっこをしていた。もちろん、鬼役は俺だ。目的はクソ貴族のクソ領主をぶん殴ることだから、取りあえず館のほうに向かっているのだが……出入り口から館までは無駄に距離があるため、たどり着く前に俺の体力が尽きそうだ。というか尽きる。

「ああもう、どうすんの俺っ！」

こんなわけのわからない世界で死にたかないし、死ぬつもりもない。かといって、鎧を纏い、剣を持ったやつらに挑みかかったところで勝てるわけもない。体力が底を付きつつあるため、逃げ切ることもできない。

「ていうか、もうさ。詰んでる、だろうがああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
アアア!!!!!!!!!!!!!!」

無理無理無理いいいいいいいいいいいいいい、よし、トビに全部押し付けよう。

思うが早く、俺はぐるりと半円を描くように走って、未だ出入口付近で戦っているだろうトビのほうに向かうことにした。

「キキー、背中斬られたー！絆創膏持っていないかあ？」

あ
い
つ
は
化
け
物
か
っ
！

なんと、トビは相手にしていた全ての騎士を倒したらしく、俺に向かって歩いてきていた。頭だけじゃなく、強さも規格外過ぎる。

あいつに任せればどうにかなるっ。

痛む腹を押さえつつ、俺は必死に走ってトビの傍へと辿り着く。

「大丈夫かキキ？　というか、また錯乱モードになってたな」

「……うん」

膝ひざに手をつき、荒い呼吸こすを整えつつ口にした。がしやがしやと鉄の擦れる音を背中で聞き、振り返る。

「なんだ、まだ倒してなかったのか？　というかオレ、背中斬られたんだよ、見てくれ」

「見せんでいい」

何が嬉しいのか、斬られた背中を喜々とした表情で見せようとするトビを制し、俺は騎士たちに向きなおる。

どうやら騎士たちはトビを警戒けいかいしているようで、半包囲の形を取りながら、じわりじわりとにじり寄ってきていた。

「キキ、後ろからも来たぞ。援軍だ、きつと」

おそらく、街に出ていた騎士たちが帰ってきたのだろう。これで囲まれたわけだ、俺とトビは。

「どうする、キキ？」

俺が訊きたいっての。本当ならばトビを焚たき付けて力技で突破したいところだが、どうもそうはいかないようだ。

「オレが全部ぶっ飛ばしてやろうか？」

「やせ我慢がまんをするな」

強がってはいるが、トビは背中の痛みでともに戦える状態じゃないはずだ。今は背中を向け合っているから見えないが、さっき顔を合わせたときの顔は青白かった。斬られた背中の出血がひどらしい。

「気にすんなよキキ。お前に拾ひろわれた命だからな、お前が行けつていやあ、オレは喜んで死んでやるよ」

「ふざけたことをぬかすな。クソ貴族のクソ領主をぶん殴って、二人そろってここを出るんだ。大丈夫だ、俺がどうにかする」

柄にもなくトビが真面目だから、何かスイッチが入っちゃったよ。腰を据すえて覚悟を決め、この窮地きゅうちを脱する方法を考える。

騎士たちが半包囲から完全な包囲態勢へとなりつつあった。

時間が無い。

何ができる、今の俺たちにできることはなんだ。考える。

戦う以外にできることはなんだ。降伏はどうだ、上手くいけば牢屋送りで済むかもしれない。いや、それではダメだ。手負いのトビが牢屋でくたばるのが目に見えている。

そうだ——っ、

「者共、かかれっっ！——！！」
来るっ、やるしかないっっ、

「貴様ら、誰に剣を向けているのか分かっておるのかつ、いい加減にせよつつつ！！！！！！」

俺は腹の底から声を絞り出し、気迫を込めて喝破した。自分でも驚くほどの声量だ。おかげで騎士たちの足が止まった。

「……誰だと？ ただの侵入者が偉そうに何を言っている。かまわ
「私は、キキ・キエイ。貴族であるぞつ」

隊長らしき人物の号令を遮り、俺は高らかに名乗りをあげた。これだけ暴れまわったあとだ、信じはしないだろう。だが、よほどの馬鹿でない限り、簡単に仕掛けてはこないはずだ。

ここまで堂々と宣言されたら、もしかしてと、疑念を抱くのが人間の心理つてものだ。

「……嘘を言うな。そのような、みすばらしい服装のものが貴族であるわけがない」

言い切りはしたが、かかれとは号令を下さない。間違いなく、相手は疑念を抱いている。是が非にでも俺が貴族だと信じさせてやる。そのうえで堂々とクソ貴族に合つてぶん殴つてやる。

「なんだと？ 貴族たる私の言葉を信じられぬと申したか」

仰々しい物言いで威圧感たつぷりに言うと、俺は隊長らしき者に向かつて一步を踏み出した。

「ち、近づくなつ。我々オルベル騎士部隊が田舎ものだからつて、舐めるなよ。貴族か、そうでないかぐらいの判別はつく」

口調の割には焦っている。内心、違つたらどうしようかと冷や冷やしているんだろう。

「よいか、しばし待っておれ」

そう言つて俺はポケットから皮の財布を取り出し、小銭入れを開く。そこから、なるべく綺麗な五百円玉をみ繕った。もちろん、新硬貨のほうだ。

「見よ」

一言だけ口にし、俺は金色に輝く五百円玉を高々と掲げる。

「……き、金だっ」

誰かの一言を皮切りに、騎士たちが騒ぎ出す。「は、初めて見た」
「王都で公開されていた金よりも大きいぞ」「なんて綺麗なんだ……」

まあ、実際は金ではなく、銅が主成分のニッケル黄銅製の硬貨なんだが、予想通りの反応を示してくれて安心したよ。

「それでも貴様らは私が貴族かどうか疑うかつ」

「……も、申し訳ありませんでした。金を持ち歩かれているようなお方が、貴族でないはずがありません！」

一斉にしゃがみこみ、頭を垂れて忠誠のポーズをとる騎士たち。
「うむ。分ければよろしい」

上手くいった良かった。ワンコインで命を護ったよ、これから俺は五百円玉に頭が上らないだろうな……

「騙されるでないっ……」

どこぞから大声が轟いた。その場の全員が半ば反射で声の方に顔を向ける。

「そやつは貴族などではない！」

視線の先。醜悪きわまりないデブが、二人の兵士を連れて館からこちらへと向かってきていた。

音楽家モーツアルトのような髪型、子供くさい赤のマント、指には宝石と思われる指輪をはめ、たゆんたゆんと揺れるお腹。絵に描いたような貴族像だ。ああ、間違いないね。

クソ貴族のクソ領主様だ。

自分から殴られにくるとは殊勝な心がけじゃあないか。今すぐ殴り逃げしたいところだが、今のトビに無理はさせたくないの、ここは落ち着いていく。

「私を知らないとは困ったものだ」

「笑わずでない。キエイ、などという苗字は聞いたこともない。さ

きほど出していた金とて、盗んだ物ではないのか？」

俺の前までやってくると汚い声きたなを発するクソ貴族。

「失礼極まりない男だな。本当に私を知らないとは、どうやら呆ばけていらつしやるようだ」

「口の減らないやつだ。ならば訊くが、お前の役職はなんだ、階級はなんだ、このような田舎町になんのようだ？」

おっと、これはマズイ。さすがにどれも答えられない、本物の貴族を相手に適当なことは通じないだろうしな。

「どうした、ほら、答えてみよ。ん？」

うつわ、ほんと殺したいはいこいつ。

「キキ」

と、今まで大人しくしていたトビが口を開いた。かなりまいっているらしく、声に力がない。

「お前は黙ってる。体力を使うな」

「ミーニヤとリーリエが来た」

「なに？」

言われて俺は振り返る。

おいおい、どういうことだこれは。一戦やらかす気か？

俺の目が捉とらえたのは、斧や鍬くわ、木の盾などで武装した一団だった。中には女子供が混じっており、ミーニヤとリーリエの姿もみつけられる。

「これは何事だつ、貴様ら平民風情がここに足を踏み入れて良いと思っておるのかっ！」

「変わらない醜みにくさだね、ゲローブ」

武装集団のリーダーと思わしき男が口にする。透すき通った落ち着いた声だ。

年齢は三十手前くらいだろう。さらさらの金髪で、男には片腕がない。

「貴様……オルタか！！ 反逆者め、ワシと戦うつもりかっ」

「別に戦ってもいいのだけれど、今日は話をしにきたんだ」

「貴様ら汚物と話す舌など、もた」

「勘違いをしないでくれ、話があるのは君じゃない。マーロン・ハルス公爵ハルス公爵の代理で来られた、キキ・キエイ男爵男爵にだ」

「なに……？」

クソ貴族が俺を見る。その眼差しには若干の驚きと猜疑さぎが含まれていた。

「というかだ、確か男爵は貴族に含まれなかったと思うが……まあ、世界が違うんだ、色々と差異さいがあって当然か。

何がなんだかわからんが、これは俺を貴族だと信じさせるチャンスだ。男に話を合わせることにする。

「久しいな、オルタ？」

そんな名前で呼ばれてたよな、確か。

「覚えてくれてたとは嬉しいよ、キキ。おっと、これはすまない。今の私は平民だから様を付けたほうが良かったかな？」

清々しいくらいにわざとらしい口調だな。この言い方からすると、オルタという男は元は貴族だったらしい。

「よしてくれ、私が敬称けいしょうを嫌っているのを知っているだろ」

「はは、分かっている、冗談さ。君と私の仲だからね」

元同僚の仲良しって設定なわけね。それにしてもわざとらしい。もう少し自然な演技ができないのかこいつは。

「まさか、本当に貴族だったとはな。それも、マーロンの使いとは……」

小声でクソ貴族がつぶやいた。どうやら完全に信じたらしい。

さて、貴族という立場を利用し、後はどうやってぶん殴る理由をつくるかだな。できればクソ貴族を領主の任から外し、権力と財力を奪ってしまいたいところだ。そうすれば、もう、リーリエにちょうつかいをだすこともなくなるだろう。

「ところでキキ。マーロン公のお耳みみに入りたい話があるんだ」

「なんだ？」

「……実はね。外交問題に発展してはいけないと思って、街の者に

口止めをしていたことがあるんだ」

「！！ オルタ、貴様っ！ お前ら何をしておるか、平民どもを敷地から叩きだせっ」

激高し、騎士たちに怒声を飛ばすクソ貴族。騎士たちが慌てた様子で動き出し、オルタ率いる集団も咄嗟に武器を構えた。

ここまで話し合ってきたのに、いまさら血を流すのはナンセンスだろうがっ、させるかっ。

「双方、剣を収めよっ！！！！」

俺は本日二度目となる喝破をする。両方の動きが止まることを願う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9375x/>

キキとあほうとにゃ

2011年11月17日03時12分発行